

同時通訳と認知的制約

水野 的
青山学院大学

同時通訳には大きな認知的負荷がかかるが、特に構造的に大きく異なる言語間の同時通訳の場合にはさらに負荷は大きくなると思われる。通訳者は限定的作動記憶容量という認知的制約をどのようにして乗り越えて同時通訳を実現しているのだろうか。本発表は作動記憶理論を軸にして同時通訳の認知的制約とその影響を検討し、小規模な実験の結果を報告する。

これまで様々な同時通訳のモデルが提案されているが、われわれの出発点は Gile の「同時通訳努力モデル」である。また努力モデルから派生した「綱渡り仮説」(tightrope hypothesis) (Gile 1999)と「移入された負荷」(imported load)という概念 (Gile 2008) も重要な示唆を与えてくれる。しかし、「綱渡り仮説」検証の試みは全体として通訳者の負荷が高いことを示すことができたが、個別のタスクの負荷を測ることはできない。同時通訳の認知的負荷を操作的に扱う方法 – 同時通訳の負荷の推移を推定できる方法はないだろうか。

ひとつの方法は、努力モデルとは逆に、プロの通訳者であれば簡単な素材ならほぼ自動的に処理できるような高度の自動性を備えている、と仮定してみることである。すると通訳者の負荷はほとんど作動記憶における記憶項目保持の負荷から生じると考えることができる。しかし、たとえ簡単な素材であっても 言語理解(L), 言語変換(T¹), 言語産出(P) の各コンポーネントが完全に自動的に行われず、保持 (M) 以外の何らかの負荷が生じる可能性はつねにある。その場合は、処理 (タスク) の難しさ (=負荷の大きさ) は処理の遅延となってあらわれ、処理の遅延は作動記憶内の保持項目を増加させ、その結果誤りや脱落が生じる、と考えればよい。すると、同時通訳の負荷は作動記憶に滞留する情報の量に還元することができる。情報の量をチャンクではかることにすれば、L, T, P などの性質が異なるタスクの負荷を一つの単位で測ることができるようになる。L, T, P にはいずれも作動記憶が関わるが、同時通訳ではそれぞれの処理の遅れが保持の増大をもたらすのである。作動記憶モデルは Cowan (1998; 2001) のモデルを採用し、同時通訳の認知的負荷を作動記憶の焦点に保持する項目数で測ることにした。さらに、英語と日本語のような構造的に異なる言語間の同時通訳では、たとえ L, T, P のプロセスが自動化されていたとしても、統語的非対称性のために作動記憶の容量を越えてしまう可能性がある。このため通訳者は絶えず作動記憶の容量を越えないように訳出方略を使用しているはずである。この仮説を実際のコーパス分析によって検証した。結果は仮説を確認するものであり、様々な訳出方略と不適切訳や脱落も観察できた。この結果はまた、間接的に Gile の「綱渡り仮説」と負荷の転移の仮説を支持していると考えられる。

¹ 努力モデルでは言語変換 (T) は P に含まれているが、ここでは分離して考える。T はもっぱら検索 (retrieval)と言語変換 (翻訳)であり、P は発話 (訳出)のタイミングの決定と構音から成る。